

See You in the Next World, Professor Matsumura!

大野 龍浩

私には何となく近寄りがたい方だった。あまりにも重鎮過ぎて……。だから、学会でお目にかかっても、遠くから会釈するだけで、気づいていただけないことも多かった。

その印象が少し変わったときが2度ある。

1度目は、2005年7月、Manchester Metropolitan University で開かれた英国ギヤスケル協会の国際大会でのこと。先生はヴィクトリア朝の美術について発表をされた。75歳。その衰えない研究意欲に頭が下がった。あいにく発表時間が重なったので、私は質疑応答の部分しか参加できなかったが、聴衆の大半がこちらの部屋に流れているのを知った。その後、グループで Manchester 市内を散策するツアーがあったが、偶然同じグループになり、そこで一言二言お話することができた。

2度目は、2012年。拙著をお送りしたあとの例会で、「ありがとうございます」と、直接ご挨拶くださったこと。30歳ほど年の離れた若い研究者に、しかも学会でたまに見かける程度の人間に、わざわざ近づいてこられた。もったいなくて感激した。

わたしが先生から学んだことは、なんと言っても、勤勉さ。現役時代はもちろん、定年後も意欲的に英文学研究を続けられた。ご業績の多さがそれを物語っている。1999年（70歳）の時点で、単著だけでも8冊、訳書も単独訳だけで5冊。共著や共訳、論文等を合わせれば、あまりに多くて、生涯業績の完全版はないという。そのうちの『ディケンズとロンドン』（研究社、1981）と『ディケンズの小説とその時代』（研究社、1989）は、私も買い求めた。

『ヴィクトリア朝：文学、文化、歴史』（英宝社、1999）と題した松村昌家教授古稀記念論文集。こういう論文集を企画する発起人がいて、それに賛同して寄稿する人が30数名もいるということ自体が、先生のお人柄を物語っている。

「何事も時がくれば」と題した巻末エッセイには、ディケンズ研究の意義を繰り返し述べられている——「ヴィクトリア朝のイギリスを知るためにはディケンズは不可欠な存在であり、またディケンズの世界を理解するためには、ヴィクトリア朝のイギリス事情に関する知識が必要だ」(534)。確かに。久しぶりに、ディケンズを演習のテキストに取り上げてみよう。

同エッセイには、「八十まで現役とはいわないまでも、もうしばらくこのまま踏みとどまって、あくせくの日を送りつづけたい」(524)とある。享年 89。このときから 19 年も長生きされ、日本中の英文学研究者に影響を与え続けられ、研究姿勢の模範を示された。ただただ頭が下がる。

今頃は来世でディケンズと話をされていることだろう。いずれ私もその仲間に加えていただく日が来るはず。その時によい報告ができるよう、現世でできるだけのことをしよう。



International Gaskell Conference at Manchester Metropolitan University, 21 July 2005
左端から 2 番目、ジャケットを着た後ろ姿の紳士が松村昌家先生

(日本ギaskell協会第 6 代会長 立正大学教授)